

授業研究「学びあいの場」を通じた教師の変容（2）

アンケート調査の自由記述内容に対する KH Coder を活用した計量テキスト分析

○若松 亮太

佐々木 良治

（広島県立呉南特別支援学校）（広島県立三原特別支援学校）

KEY WORDS: 質的分析 同僚との対話 弁証法的統合

【目的】

A 県立 B 特別支援学校では令和 2 年度から、富山大学人間発達科学部附属特別支援学校が開発した、富附特支型研修「学びあいの場」を取り入れ、「教師の『子供の見方』を豊かにする」ことを目的に研究をスタートさせた。

「学びあいの場」とは、授業中の子供の様子を「言動」と「解釈」に分けて参観し、参観者同士、及び参観者・授業者による各聴きあいを通じて、教師の「子供の見方」を豊かにすることを目指した授業研究である。少人数で編成した参観者同士の聴きあい、LC（ラベル・コミュニケーション）では、気になる子供の姿を書いた言動ラベル（青ラベル）と、その時の子供の内面を推察して書いた解釈ラベル（赤ラベル）を持ち寄って行う。授業者と参観者の聴きあい、AL（アクティブ・リスニング）では、LC で聴きあった内容を基に授業者へ質問し、参観者の解釈に、授業者の解釈も重ね合わせながら、聴きあいを深める（竹村, 2019）。

本研究は、授業研究「学びあいの場」実施後の教師へのアンケート調査を通じ、「子供の見方の豊かさ」に関連する因子を抽出し、その様相を明らかにすることを目的とする。

【方法】

「学びあいの場」実施後、アンケート調査を実施した（一連発表の（1）を参照）。「子供の見方の豊かさ」とテキストデータの関連性を捉えるため、KH Coder の「共起ネットワーク」コマンドにより、自由記述内容の計量的テキスト分析を行った。これは、共起の程度が強い語（出現パターンの似通った語）を線で結んだネットワーク図を描くものである（樋口, 2020）。共起関係の強弱の測定には Jaccard 係数を用いた。

【結果】

「見る力の高まり」の自由記述内容で分析対象となった語（出現回数 3 回以上）は 54、線は 62、及び密度は 0.043 であった（Fig. 1）。分析から 9 因子を抽出し、Table 1 のとおり特徴付けた。共起の強い語は「青」「ラベル」「事実」「書く」「発言」「聞き取る」「子供」「言動」「見る」「行動」「考える」、及び「いろいろ」「聞ける」であった。

因子 1 「行動の理由を考える」では、参観者からは「子供のどの行動を見るかという注目箇所の違いや、行動の理由の捉え方の違いを知ることによって、子供の見方・考え方に新しい発見があった。」や「協同リフを行ったことで、今後子供の言動を見るときに、一つの解釈だけではなく、違う解釈がないかを考えようと思った。」、授業者からは「子供の行動に対して、意図を考えたことがなかった部分を聞かれ、改めて子供の言動への意図を考えるきっかけになった。」と回答があった。

因子 2 「違う視点を聞く」の、「他の先生方の意見を聞いて自分の意見と違いがあり、同じ事象を見るのでも視点が違い、捉え方が違うことが分かった。」や「他の視点からの見方を聞いて、捉え方の幅が広がったと思う。」という回答からは、同じ気になる場面を青ラベルに取り上げても、赤ラベルに書かれた解釈の違いがあったことが見方の豊かさにつながったと考えられた。また、「多くの視点の解釈を聴くことができて、おもしろかった。私とは目の付け所が違う話を聞くことができた。」や「他の先生方の気になる子供

の言動について、自分では聞き流していたこともあったので、そういった点にも気を付けながら見ていきたいと感じた。」という回答からは、同じ授業を見ている、取り上げた気になる場面が異なることについて言及されていた。

【考察】

「見る力の高まり」につながったという回答の自由記述内容には、特に因子 1 及び 2 において、他の教員との違いから新たな発見がある等、「違いから学ぶ」ことへの言及が特徴的であった。LC、AL 及び協同学習リフレクションを通じた同僚との対話の過程において、新たな「子供の見方」に触れることは、その「豊かさ」につながると推察された。

一方、「学びあいの場」設計の基となった「弁証法的統合」の考え方においては、事実の一つであっても、真実は人によって異なることから、相対的な客観性を高め、より合意に近付けることが重要とされている。各人の志向性が反映された捉えを重ね合わせたときに、より重なった

Table 1 「見る力の高まり」の因子

因子	特徴後
行動の理由を考える	解釈 行動 考える 高まる 部分 理由 力 違い 言葉 細かい 実際 捉える 発言 聞き取る
違う視点を聞く	視点 違う 聞く 先生 意見 他 場面 聞ける いろいろ 注目 少し 慣れる 機会 気づく 客観 今 集中 少ない 多い 注意 子供 見る 言動 授業 思う 参観
広く(客観的に)深く(一人を)見る	見方 知る 実際 自分 感じる 指導 注視 時間 動き 時間の流れ
子供の言動を見ること	事実 客観性 子供の見方への影響 学びあいの場を通して 感じること 言動への注視と 学習指導要領 子供の動きを見る 時間の流れ
事実を書く意識	意識 事実 書く ラベル 音

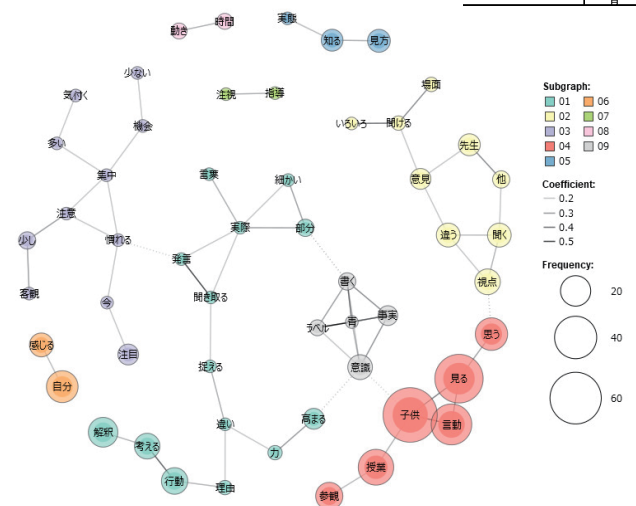


Fig.1 「見る力の高まり」の共起ネットワーク

部分については、対象の深い真実に近付いたといえる。この考え方に照らすと、同僚と「捉え（事実を基にした解釈）」の重ね合わせにより、より「深い真実（相対的に客観性の高い解釈）」を見出すことは、今後の課題といえる。※事例発表に際し、所属長の許可を得て掲載している。

（文献）

- 樋口耕一（2020）社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して。ナカニシヤ出版。
竹村哲（2019）実践！特別支援教育のアクティブ・ラーニング 子どもの内面を捉え、学びの過程に寄り添う教員研修。中央法規出版。
(WAKAMATSU Ryota, SASAKI Ryoji)